



夏目漱石の病歴と生活（八）

広島文化学園大学大学院看護学研究科

森下 恭光

■ 緒言

本稿は夏目漱石の最晩年における病歴と生活について、その実態を明らかにすることを企図している。対象期間は、大正五年一月一日より同年十二月九日、夏目漱石死去に至る約一年間である。

前稿までと異なるのは、その考察対象が、彼の死を以て尽きるところにある。中でも、病歴は死へ向かっての過程を意味するので、限られていても可能な限り詳細に検証して行く。資料としては、本人により記された日記・断片、書簡、談話を始めとして、医師、家族、とくに、夫人の鏡子による回想、友人、門下生の談話、記述が用いられる。

生活については、夏目の日常生活、創作活動、友人、門下生、家族その他の人物との関係が対象になり、資料としては、夏目自身により記された日記、断片、書簡、そして作品としては、遺作となり未完でもあった『明暗』が代表的なものとしてあり、医師、家族、友人、門下生等によってなされる談話がある。

生活については、前稿においてもそうであったように、家庭において家族に見せる面と家庭外において交渉をもつ者に見せる面に相当な違いがあることに意を用い、家庭において、とくに、夫人に対して見せる生活者としての夏目を知り得る重要資料として鏡子夫人の回想を重要な資料として用いる。

以上によって本稿の構成はなされることになるが、前稿までの論考によって明らかにできたことと、本稿によってなされる論考の関係を予想するとき、それが良き連続性を持ち、そのことによって夏目漱石という偉大な個性の輪郭が少しでも明瞭な形で示し得るものになるよう、祈念にも似た想念を抱き本稿を作成して行く所存であることを蛇足と知りつつ付記しておきたい。

■ 最晩年の序章

文字どおり漱石の最晩年になった大正五年の正月は一応平穏な中で迎えた。健康面では昨年末より左肩の鈍痛が治らず、鏡子夫人によれば、「按摩をしたりお湯に入ったりしてましたが、いつまでたっても同じような痛みで埒があきません。」¹⁾ という状態であった。

漱石自身述懐しているように、夏目家の正月はとくに改まったことは行わず、「年賀の客は、多く若い人で、四角張った人は来ないから、別に来客に対する饗応とて、待ち受けの儀式もご馳走もない。」²⁾ というようにごく一般的な正月を迎えていたので、外面的には通常と異なる事態は見られない。

この年夏目が最初に認めた書簡は小宮豊隆の二男（一月五日出生）の命名を依頼されたことに対する返信で、思いつきとことわりながら計八つの案を示している。³⁾

しかし、そのいずれにも決まらなかったため、一月十日に「金吾或は金伍にては如何がかと思う。」⁴⁾

もりした やすみつ

〒737-0004 広島県呉市阿賀南2-10-3 広島文化学園大学大学院看護学研究科

と書き送り、結局、「金吾」と決まる。

平穏な日常をうかがわせるような書簡がある一方で、一月十九日付で発信された東京朝日新聞の松山忠二郎に宛てた書簡に「小生去冬以来風邪の気味にてそれが為か左の肩より腕へかけては鈍痛はげしくリュウマチか肩の凝か知らざれど兎に角医者の手にならず困り入候現に原稿などをかくのが非常の苦痛と努力に候⁵⁾と、率直に自身の肉体的苦痛を訴えていながら、一月一日より一月二十一日まで『點頭録』⁶⁾を『東京朝日新聞』、『大阪朝日新聞』両紙に連載し、更に一月十四日より同十九日（^註書簡発信の当日）まで連日相撲見物のため本所区（当時）の国技館まで通っている。

この時期、体調不良にもかかわらず、6日間にわたり相撲見物をしていることには、違和感をおぼえるものの、体調回復をはかるため、過去にも経験のある温泉療養を計画し、一月二十八日に湯河原の天野屋に転地する。二月十六日に帰京しているので3週間に満たない転地であり、単身で出発し、途中、鏡子が来訪したり、親友の中村是好と同道の日々があるなど、必ずしも療養に専念したといえるものではなかった。

しかし、注目されるのは、この転地療養という名目で湯河原に滞在している間、ただ宿に停泊して保養に努めたわけではなく、その間に湯河原近くの真鶴に出掛けた時の見聞、それは風景描写、あるいは訪問先で出会った人々の談話内容、そして、それらについての夏目の感想などをかなり克明に描写記述しており、字数を確認すると6,500字を越えている。⁷⁾

しかも、それらの記述の中には自己の体調にふれる記述を残すことをしていないというところに通常の夏目と異なるところがある。

二月十六日に帰京した夏目は、二月十八日付で祥福寺⁸⁾で禅修業中の僧侶、鬼村元成に宛てた書簡を送り「私はリュウマチの気味で転地して相州湯河原という温泉に廿日間ばかり暮していました 一昨夜帰って御手紙を見ました 病気の方はまあよい方です⁹⁾と近況を伝えている。この内容から見る限り、転地療養は短期間ではあり、集中的に行われたわけではないにしても無効ではなかったことが認められる。

翌日の十九日付で芥川龍之介宛に送った書簡で漱石は、新進の作家芥川にとって、貴重な激励の評語を贈る。芥川は、大正四年十二月、東大同級生の林原（当時岡田）に伴われ初めて漱石宅を訪れた、漱石にとっては最も新しい門下生である。この書簡において、大正五年二月十五日に創刊されたばかりの第四次『新思潮』に掲載された芥川の『鼻』¹⁰⁾を読んだ読後感を述べている。

「あなたのもの（^註『鼻』）は大変面白いと思います 落着があって巫山戯ていなくて自然其俣の可笑味がおっとり出ている所に上品な趣があります 夫から材料が非常に新らしいのが眼につきます 文章が要領を得て能く整っています 敬服しました。」¹¹⁾とあり、漱石は芥川の『鼻』に対し最大限ともいえる評価を与えている。そして、同書簡の中で更なる創作発表を促している。20歳代の半ばにある芥川に対し50歳に近い漱石が惜しむことのない讃辞を贈っている。そのことは以後の芥川の創作活動への多大な刺戟となったであろうことは想像に難くない。

この時期における漱石の健康状態を伝えるものとしては、三月十六日付で森成麟造¹²⁾宛に送った書簡の追伸の部分に「両三日来風邪に〔て〕臥蓐此手紙床の上に起き直りて書いたもの」¹³⁾との記述がある。それは、医師である森成に対して風邪（多分、自己診断であろう。）により三日程病床にあることを告げるもので、肩の痛みには一切触れていない。

しかし、3日後の三月十九日付で門馬春雄宛の葉書には「私の腕の痛は大分好くなりました」¹⁴⁾とあるので、腕の痛みが解消していたわけではない。約1ヶ月後の四月十八日、愛媛県尋常中学校時代の教え子真鍋嘉一郎医師の診察により、腕の痛みは、リュウマチによるものではなく糖尿病によるものと判明する。¹⁵⁾

四月二十日付で東京帝国大学医科大学物理的治療室真鍋嘉一郎に宛てた書簡には「十九日朝より二十日朝に至る迄二十四時間の尿を一部分差出し候間可然御検査相成度候」¹⁶⁾とあることにより尿検査が開始されたことがわかる。この書簡文は私信としては珍しく漢字が多用され、公用文のような印象を受ける。当書簡には自己の病身故の不安、とくに胃痛に触れる内容もあり、かつての教え子とはいえ、権威ある医師としての真鍋を信頼し、率直な想いを吐露している。

同時期に記された四月二十一日、二十三日、二十六日、二十九日、五月二日、三日、五日、十六日の日記には検尿とその結果についての記述が簡明に記されている。事実の記述に徹したもので、結果についての感想は一切記されていない。採尿前の食事の種類と量、採尿の時間など、真鍋医師からの指示内容、そして糖の出る量については「糖なし」「糖出る」と、きわめて事務的に記述している。

以後、やや日が空いて五月二十八日、六月二十日頃、六月二十九日、六月三十日、七月十一日と尿検査に関する記事が見られ、以後の日記には見られない。日記そのものも七月二十七日以降は途絶えている。

真鍋医師に宛てた書簡は、四月二十二日、五月一日、六月二十一日、七月九日に発信され、それは月毎に、間隔に関係なく発信されている。そして、文面は七月九日付の書簡を除き、他はすべて漢字を多用した公用文的内容のものである。その七月九日付の書簡に限って、例外的に、私的文面になっているのは「毎々尿を試験して頂いて有難う御座います御蔭で糖分も減退腕の神経痛も癒りました感謝しています」¹⁷⁾とあることで察しられるとおおり、腕の痛みが解消したことを伝える喜びの書簡であることによるであろう。

年来の宿病である胃病はこの間も持続しており、五月六日付で鬼村元成に宛てた書簡の末尾に、「私は始終からだ[が]悪くて困りますまあ病気をしに生れに來たような気がします」¹⁸⁾とあり、荒正人は、五月七日より五月十六日まで胃病で病床に就いたことを指す、とする。¹⁹⁾

■ 小説『明暗』の創作と背景

夏目の創作活動は、五月二十一日付で東京朝日新聞社の山本松之助に宛てた書簡に「此間中から少々不快臥牀それで小説の書き出しが予定より少々遅くになって済みませ[ん]」²⁰⁾とあることによって五月の下旬に始まったことが推測される。

小説の題名が『明暗』であることは前出の山本松之助宛の書簡中に記されている。題名の『明暗』は禅語からとられており、『碧巖録』（第五十一則）の『明暗雙雙底時節』²¹⁾の上2文字をとったものである。禅語としての解釈によれば、明は有で差別、暗は無で平等の意とされるということであるが、漱石は、小説の題名を選ぶ時点でその意味を承知していたと考えるべきであろう。

『明暗』は、大正五年五月二十六日から十二月十四日まで、東京朝日新聞、大阪朝日新聞に連載された。ただし、大阪朝日新聞は途中休載があり、十二月二十七日まで連載された。漱石は十二月九日に死去しているので、未完ということになる。

『明暗』の執筆活動は前に触れたように、漱石が大正四年末より肩の不調を訴え、それがリュウマチによるものと思いつづけた後、真鍋医師の診察により糖尿病を原因とする症状と判明し、以後定期的に検尿による診察と治療を受けている時期と重なる中で始まっていることは創作活動の背景として重要である。

さらに、前作の『道草』が約1年前の大正四年六月三日より同年九月十四日まで連載され、その内容により自伝的作品としてとらえられていることも背景の一要因になる。

『道草』²²⁾の主人公の健三は、ロンドン滞在の経歴を持つ大学教師という設定になっており、胃病に悩む病身である上に自己中心で神経質という性格描写も加えられていることから漱石その人がイメージされる。他の登場人物も殆んどそのモデルがイメージされるものであったから、自伝的作品と称されるのである。

しかし、健三のモデルが漱石であるとするのは、作者の漱石が健三であるということにはならないことは三好行雄の論ずるとおおりである。²³⁾とはいえ、自伝的作品といわれる『道草』を創作した後につづく『明暗』を見るとき、前作の『道草』は当然ながらその背景となる。しかし、『明暗』が、未完であるという厳然たる事実を具えているため、越えることのできない壁を持つ。その前提の下に以下の論述を行う。

まず、主要人物として以下の9人をあげ、それぞれの人物設定をとらえる。

1、津田由雄、本作品の主人公にあたる。大学出身の会社員で30歳。半年ほど前に結婚。妻の名は延（お延）。以前恋人の清子（後出）と理由不明な別れを経験。痔病に苦しみ、そのことが本作品の流れに

大きく作用する。性格としては自己中心的で妻を初め他者に対して寛大ではない。

2, 津田延子（お延）、23歳で、津田との結婚は自分の意志による。自由意志の表現としての愛に意義を感じ、夫への愛もそのようなものとして注がれ、それが報いられることを強く求める。

3, 堀秀（お秀・秀子）、津田の妹で24歳。容色に恵まれ、理知的な性格で、その眼は、兄やその妻に対して厳しく、批判的に向けられる。夫との間に2人の子供があり、義理の母、弟、妹に囲まれ、家庭的にはストレスの多い女性である。

4, 津田の父、官吏として活躍し、10年前に実業界に入り、2年前から京都で余裕ある生活を営む。津田の生計に援助を与えている。

実子の津田に対しては他力を頼むその態度に不満を抱く。

5, 藤井、津田の父の弟で、文筆業を営む。冷めた眼で人生を傍観する。津田は叔父である藤井の世話を受けたことがある。

6, 岡本、延子の叔父で藤井や吉川（後出）とは古くからの親友。延子は子供の時から岡本の世話を受けており、結婚時にも援助を受けた。

7, 小林、津田の友人で、本作中で最も特異な人物。社会主義的思想の持ち主でもある。ただ、やがて朝鮮へ渡り、そこの新聞社に勤めることになっているので、位置づけが困難である。

8, 吉川夫人、津田の勤務先の上司吉川の夫人。40歳を越えており、かつて津田に清子（後出）を引き合わせたこともある。津田の結婚では吉川夫妻が媒酌人をつとめる。津田は種々の局面で吉川夫人のコントロール下に入り、かつて恋人であった清子に会うのも吉川夫人の計略である。

9, 関清子、津田のかつての恋人。年令についての記述はない。清子という命名により人物のイメージが与えられる印象があるものの、津田にとっては理由がわからぬままに別れた女性という設定になっている。そのことが再会という展開の中でどういう意味を持つかは謎として残る。

以上の9人が『明暗』に登場する主要人物であり、主要人物として登場する以上、内容展開の上で、人物設定の意図に付合した活動をすることになるが、未完であるため、展開の結末が不明のため、評価も困難になる。

とはいえ、漱石の遺作となった『明暗』によって作者漱石が、彼の人生のこの時点において、主人公およびその周辺をなす人物の生活、活動を通してどのような結末を構想していたかについて想像を試みすることは漱石理解の上で必要な作業であろう。

『明暗』の連載が始まって約3ヶ月を経た八月二十一日付で漱石は久米正雄、芥川龍之介に宛てて書簡を送っている。その中に「僕は不相変「明暗」を午前中書いています。心持は苦痛、快樂、器械的、此三つをかねています。夫でも毎日百回近くもあんな事を書いていると大いに俗了された心持になりますので三四日前から午後の日課として漢詩を作ります。」²⁴⁾と記した後で、「尋仙未向碧山行。住在人間足道情。明暗雙雙三萬字。撫摩石印自由成。」²⁵⁾という七言絶句の漢詩を披露している。詩中にある「明暗雙雙」というのは禅語である、と書き添えてはいるが意味の解説はしていない。ところで漱石が知るところの「明暗雙雙」という禅語は『碧巖録第五十一則』（前出）にあり、加藤二郎の『漱石と禅』によれば、漱石の蔵書であり愛読書でもあった『碧巖夾山鈔』にある「明暗雙雙」の註として「明暗ハ即隱顯隱顯ハ即迷悟也又理事也」の記述のあることを引用し、漱石が「明暗雙雙」の意義を熟知していたであろうことを推測している。²⁶⁾

漱石と禅のつながりは明治二十七年（1894年）十二月（二十三日）に鎌倉円覚寺塔頭帰源院に入り釈宗演の下で翌年一月七日までの約2週間参禅した²⁷⁾のに始まり、以後、連続的ではないにしても深いものがある。

また、若き禅僧である鬼村元成²⁸⁾とは大正三年より親交し、計30通の書簡を送っている。

さらに、富沢敬道²⁹⁾という若き禅僧とは大正四年より親交し、5通の書簡を送っていることにも見られるとおり、とくに、夏目の最晩年にあたる大正五年における兩人との交流には精神的交流としての大きな意義がある。

漱石が二人の若い雲水との交流をいかに楽しんでいたかについては、鏡子夫人の回想に、「亡くなった後でみますと、机のわきの手文庫の中に、その二人の若い禅僧の手紙ばかり何通となく特別にしまって

おきました。』³⁰⁾とあることによって明らかである。

このような背景の中で執筆された『明暗』の展開は、未完である故に不可解であるが、その予測には、大きくとらえると2通りあることが知られる。

一つは、「則天去私」³¹⁾を理想的境地としてとらえ、それを作品の中で登場人物が繰り広げる「我の主張」からもたらされる葛藤を和らげ救済する方向性として示そうとしていたとするものである。小宮豊隆に代表される予測である。しかし、その小宮でさえ、「我々はただ未完結の『明暗』を抱いて、勝手な憶測を試みているより仕方がないのである。』³²⁾と記す。

今一つは、『明暗』は救済という究極の目標の達成手段を示すことを意図したのではなく、人間が持つ自我へのこだわりが生み出す醜い生活の実相を描き尽くすことにその創作意図があった、とするもので、三好行雄はその立場をとるものとして、「すくなくとも『明暗』は最後まで日本的救済を拒否して、人間のおぞましい生の実相を描くという、そういう一貫した構想をもっていたんだらうという気がいたしますね。』³³⁾と語る。

■ 『明暗』の絶筆、そして死

鏡子夫人によると、「全体この夏頃から、後で考えれば何となく生気がなく、背中にアセモらしいものができて、お湯から上がるとそれに粉の薬をすり込むように塗ってやるのでしたが、薬をすりこみながら背をこすっておりますと、気のせいか背中肉が一日増しに落ちてく心配がします。』³⁴⁾と直接に漱石の肉体に接した立場からの感想を述べている。

精神面では、神経衰弱の病状は減退期にあったとはいえ、娘の筆の談話では『明暗』の執筆中はかなり激しい緊張状態にあったという。³⁵⁾

家族から見るとそのような状態にあった漱石であったが、外部にそれが伝わっていたかは疑問である。

八月五日付で和辻哲郎に宛てた書簡に、「此夏は大変凌ぎい、ようで毎日小説を書くのも苦痛がない位です僕は庭の芭蕉の傍に畳み椅子を置いて其上に寝ています好い気持です身体の具合が小説を書くのも骨が折れません却って愉快を感じる事があります」³⁶⁾とあることから察する限り、漱石の精神面、肉体面の苦悩の表出は見られない。受信者の和辻も文面どおりに受け取ったであろう。

八月中に漱石が発信した書簡は13通に及び、しかも、その中でも久米正雄、芥川龍之介に宛てた書簡は長文で、とくに八月二十四日付の書簡は2,000字を越えるものである。

鏡子夫人の回想も娘の筆子の談話も偽りではないはずで、この例を似てしても家族の見る漱石と外部の者の見る漱石の像に相違のあることが察しられる。

『明暗』執筆中の漱石は、八月二十一日付で久米正雄、芥川龍之介宛に送った書簡に、『明暗』を午前中に書き、午後の日課として漢詩を日に一作位のペースで作っていることを伝えている。³⁷⁾

さらに、書画に親しむこともつづけられ、画の方は津田亀次郎との交流は依然としてつづいており、書の方では良寛の書に親しみ、医師の森成麟造との良寛の書をめぐる音信は三月、四月にみられる。³⁸⁾

漱石自身の書については、鏡子夫人の回想によると「木曜会」に正午過ぎになると毎回出席しその度に漱石に書を所望というより強制に近い形で書かせる「中央公論」の瀧田樗蔭の事が記されている。書は画も含めて瀧田以外にも求める者が多数いたことも回想されている。³⁹⁾

書についてのエピソードを鏡子夫人のほかにも求めるばあい、最も多く漱石の書を所望した瀧田樗蔭があげられる。瀧田自身の回想により当時の夏目の書とのかかわりを以下に見る。

瀧田は、東京帝国大学の英文科学生時代に夏目講師の「マクベス」の講義を聴講して以来、「中央公論」の社員として夏目宅を社用で訪ねたのを端緒に徐々に接近し、ついに晩年に至ると「木曜会」には殆んど欠かさず出席し、午後の2,3時から夕方5,6時頃まで何かを書いてもらうようになった。したがって、夜の時間はいわゆる門下生のために開かれたのに対して、昼の時間は瀧田を初めとして書画に興味ある者達のための時間という様相であったと述懐している。このことについては、瀧田自身、遠慮すべきとの思いもあったとしながらも「実は先生にも多少僕が行って書画をおねだりするのを待ち設けられたような気味がないでもなかったようだ。」⁴⁰⁾と言いつつ添えている。

九月に入ってから漱石の体調を伝える資料としては、九月五日付で瀧田哲太郎（樗蔭）に宛てた書簡に「小生も此間中より下痢の気味にて御馳走は多少辟易の体に有之」⁴¹⁾と記していることによって不調であることが知られるが、2日後の九月七日には木曜会を催し、相当数の来客（瀧田、久米、芥川を含む）を迎えているので、重度の症状ではなかったことが推測される。そのことは、九月七日付で医師の真鍋に送った書簡の追伸部分に「目下少々下痢の気味にて十日程相つづき居候但し身体には何等の別候なき故其俣に致し置候」⁴²⁾と記していることにより確認される。とはいえ、九月二十五日付で十月に来訪予定の若き禅僧鬼村元成宛に認めた書簡中に「時間と病軀が許すなら一二度は何処かへ一所に行きましよう」⁴³⁾と書き添えていることにより、この時点でも復調していないことが察しられる。

十月に入ってから漱石は、書簡によって見る限り、体調に異変は生じていない。

糖尿病の治療が継続していることは真鍋医師による尿の検査が続いていることで確認される。

十月も末に近い二十日過ぎ（荒は二十三日と推定）⁴⁴⁾若き禅僧・富沢敬道（24歳）と鬼村元成（21歳）が漱石宅に来泊。

十月二十六日（木）、二人を木曜会に出席のメンバーに紹介する。漱石が直接に二人にかかわったのはそれが主なるもので、他の帝国劇場への案内、歌舞伎座への案内などは鏡子夫人が行っている。2人が帰ったのは十月三十一日であったから約1週間の夏目家滞在であった。病軀と自ら称する漱石はさすがに外出して案内することは出来なかったが、彼等の滞在中がいかにかいものであったかは、鏡子夫人による次の回想によって明白である。

「その偽りのない、あけすけとした、しかも単純のうちに礼儀と感謝の念のこもってるのが、いたく夏目を感じさせた様子でした。」⁴⁵⁾

2人の滞在は鏡子夫人にとっても快いものであったことが推測される回想である。

病軀とはいいいながら『明暗』執筆、漢詩作り、書画への傾斜、そして若き禅僧との接触など、生活上に見られる漱石の状況は平穏な様相を見せている。

しかし、十一月に入ると、状況は大きな変化を見せることになる。とくに、その後半になるとそれが顕著になる。それは最も身近で、漱石の身体を直接に見る立場にある鏡子夫人にとって、だれよりも早い時点において眼に付き始めていた。「十一月頃になると、めっきり痩せ衰えておりました。今から思えば秋頃からもうそろそろ死の微候があったのでございましょう。」⁴⁶⁾回想であるだけに時日の特定は困難である上に、医師でもない鏡子夫人の見立てであるから、この回想を基にして断定することはできないが重要な資料であることは否定できない。

漱石自身によるものとしては、この期間に記した日記・断片がないため『明暗』を除くと書簡が唯一の資料になる。

漱石が最後に認めた書簡（書簡集に収録しているもの）、十一月十九日付のものまでのすべてを調べても漱石自身の健康、体調に触れる記述はまったく見られない。

漱石自身によって記された書簡が当時の体調を知る資料とはならないのであれば、他者によって伝えられる資料を求めることになる。

最後の木曜会となった十一月十六日の会に出席した赤木桁平は大正二年より漱石の木曜会に出席しており、この日の漱石について「先生の気嫌が平生よりもさらに善く、始終にこにこしながら、例の『則天去私』ということに就いて話された。」⁴⁷⁾と回想していることから推しても当時の体調を察知できなかったことが知られる。

唯一身近な存在である鏡子夫人の回想によってこの時期についての状況を調べると、十一月二十日前のこととして、山田三良夫人が自身の妹の結婚式（二十一日挙行）に出席してもらいたい旨を伝える来訪があったとの内容がある。この時の夏目の答えはあいまいであったが理由は体調の不良ということではなかった。結局、当日の状況次第という条件つきで出席の返事をしている。

結婚式当日の十一月二十一日、漱石は夫人と共に出席した。夫人によれば披露宴会場（精養軒、当時は築地）⁴⁸⁾では席が男女別々になっているので、出がけに胃が痛いと言っていたことが気になりつつ別れて着席する。そこで、食卓に南京豆が出ているのを見ると、夏目の好物であるだけに、それを食べるに違いないと、不安を抱く。案の上、夏目は遠目にうかがうとつまんでいるらしいので不安がつる。

帰途、南京豆のことを問うと、食べたと答えた上に「なあに、もうすっかりなおったよ」と、来た時と違い気分も大分よくなっているようすであったし、帰宅後も何事もなく過ごし、安眠することができた」と回想している。⁴⁹⁾

しかし、平穏であったのはこの日が最後となる。

ところで、この結婚式の新郎辰野隆⁵⁰⁾は東京帝国大学で仏文学を教える教員であり、漱石の文学を愛好する読者でもあった。その日のことを辰野は「今でも忘れないのは、当年の新郎（註辰野）新婦が客人を待ち受けているところへ、漱石大人が一たしか令夫人と一緒に来たように記憶している一不意に現れた、一寸立ちどまって僕の方をみながら只一言、「やあ！」と言った声と顔つきであった。」と回想している。⁵¹⁾

翌日の十一月二十二日、夏目の体調に異変が起こる。家政婦が書斎に菓を運んだところ、机に伏せている夏目を発見。机上には、「189」⁵²⁾と回数だけ記された原稿用紙が置かれているのを鏡子夫人は発見する。夏目はその時「人間も何だな、死ぬなんてことはなんでもないもんだな。おれは今こうやって苦しんでいながら辞世を考えたまよ」⁵³⁾と言ったという。

以後、夏目は病床の人となる。原稿のことは気かけながら、ついに死に至るまでペンを執ることはなかった。

夏目の病状は急速に悪化の経過をたどったとはいえないが確実に衰弱して行く。主治医は糖尿病の治療を担当して来た真鍋に依頼するよう夏目自身の希望で決まる。鏡子夫人によれば二十二日から二十七日までの病状は深刻なものではなかった。急変があったのは二十七日で、夜間の12時頃、夏目が起き上がり、「頭がどうかしている。水をかけてくれ、水をかけてくれ」⁵⁴⁾とせき立てるのに事態の急であることを知り、真鍋ではなく近所の医師を呼ぶ。

翌日、夫人は夏目の胃部が「瓢箪」のようにふくれていることから大きな内出血を起こしていると考ええる。夫人は真鍋の希望により専門医に治療を任せる。一方、夏目は、そういう切迫した状態にありながら、『明暗』の原稿を気かけ、20回分ぐらいい先へ書いて送ってあること、その内起きて書けるだろうなど話し⁵⁵⁾、その件についての指示を出す。

十二月二日、真鍋のいる前で2度目の大内出血を起こし昏睡状態に陥る。しかし、意識が戻ると、周囲の者に指示を出すという状況であった。そのことを夏目自身がわが身の状況についての意識がなかったことによるのではないかと夫人は推察する。しかし、夏目の認識がいかなるものであったにせよ事態は深刻の度を急速に増して行く。主治医の真鍋が絶望を口に始めたのは、八日の夜であり⁵⁶⁾、九日の朝になると、いよいよ事態が切迫する。夫人は改めて面会謝絶を解き、見舞いに来訪した友人、門下生などを順に病室へ入れる⁵⁷⁾。いよいよ臨終の時を迎えようとする夏目のようすを伝える鈴木敏也によれば、午後六時ごろより死を迎える6時50分に至る間に夏目の発した言葉の主なものとして、「苦しいから注射をして呉れ死ぬと困るから」、「胸と頭に水を水を、水をぶつ掛けて呉れ」、そして、最後に看護婦が止むなく水を含んで顔一面に吹きかけたのに対して物静かに発せられた「有り難い」の一言があり、それが夏目の人生最後のことばとなった。⁵⁸⁾

夏目の最期の瞬間に立ちあった森田草平によれば、「時計を片手にじっと先生の脈所を握っていた主治医の真鍋国手は、先生の息が絶えてからも、なお暫くの間はその手を放さなかった。そして、もう何うしても脈が聞えないと見ると、坐り直して、「いよいよ御臨終で御座います、どうも行き届きませんでした」と、改めて奥さん始め遺族の方達に挨拶をされた。」⁵⁹⁾と、夏目の臨終が厳粛なものであったことを記している。こうして、立会う家族と多くの見舞客の視線の中で、夏目は満49年にわたる生涯を閉じた。

■ 結言

本稿によって明らかにし得たことをあげると、次の3点に要約される。

その1、最晩年の病歴は糖尿病に始まり、娘筆子の談話により伝えられる神経衰弱の病状も見られた。糖尿病の方は真鍋医師による治療によって改善されて行くが、併行して、持病である胃病が悪化し、十一月二十八日の大内出血があり、人事不省に陥る。次いで十二月二日に2度目の大内出血があり人事

不省に陥る。その後は七日、八日と衰弱が深刻化し、十二月九日に死去ということによって胃病が夏目の病歴にとっては致命的なものになったということ。

その2、創作活動においては、『明暗』が最重要なものとしてあげられるが、188回の連載で未完に終わっていることから、夏目が本作品によって何を意図したかについて特定することが不可能であること。

その3、夏目の生活については、家族、友人、門下生のいずれについてもトラブルと見られるような事態が生じていないこと。

とくに、若年の門下生である芥川龍之介、久米正雄との関係と、若き修業僧の鬼村元成、富沢敬道との関係は格別で、年齢を越えた親和力を夏目の側から発している感が強いこと。

そして、趣味としての書画、とりわけ書については鑑賞、創作に相当の時間を費やし、その執心ぶりが顕著であること。

さらに、体調不良の時期にあって、一月十四日より十九日まで連続して国技館に通い、大相撲を観戦していることにより、夏目の相撲愛好の強度がうかがわれること。そのことは『父の法要』に、次男の夏目伸六が父の夏目が大相撲の本場所をよく観戦したことを記している⁶⁰⁾ ことによって相撲観戦が夏目の趣味であったことが確認される。

以上、その1よりその3にわたり記述したことについては、明らかにし得たと考える。

注

- 1) 夏目鏡子 松岡譲筆録、漱石の思ひ出、後篇、角川書店、昭和三十六年、135ページ。
- 2) 夏目漱石、私のお正月、漱石全集第三十四巻所収、岩波書店、1980年、198ページ。
- 3) 夏目漱石、書簡、漱石全集第三十一巻所収、岩波書店、1980年、182ページ。
- 4) 同前書、183ページ。
- 5) 同前書、185ページ。
- 6) 夏目漱石、漱石全集、第三十五巻に「軍国主義」、「トライチケ」の題名記載。岩波書店、1980年、229ページ。
- 7) 夏目漱石、日記及断片、漱石全集第二十六巻所収、岩波書店、1979年、181-189ページ。
- 8) 神戸市平野町所在の禅寺。
- 9) 夏目漱石、書簡、前掲書、186ページ。
- 10) 芥川龍之介が大正五年二月に第四次『新思潮』に発表。禅智内供という僧が自らの巨大な鼻をめぐりくりひろげる悲喜劇を描いた短篇小説。
- 11) 夏目漱石、書簡、前掲書、187ページ。
- 12) 森成麟造は、夏目が修善寺温泉で危篤状態に陥った折に最も世話になった当時長与胃腸病院医師（当時）。
- 13) 夏目漱石、書簡、前掲書、193ページ。
- 14) 同前書、194ページ。
- 15) 荒正人、増補改訂漱石研究年表、集英社、昭和五十九年、838ページ。
- 16) 夏目漱石、書簡、前掲書、197ページ。
- 17) 同前書、208ページ。
- 18) 同前書、200ページ。
- 19) 荒正人、増補改訂漱石研究年表、前掲書、840ページ。
- 20) 夏目漱石、書簡、前掲書、201ページ。
- 21) 今井福山校 中川洪庵著、禅語字彙、森江書店、昭和四十三年、384ページ。
- 22) 夏目漱石、道草、漱石全集第十三巻所収、岩波書店、1979年、5-230ページ。
- 23) 三好行雄編、夏目漱石事典、別冊國文學 NO.39、學燈社、平成二年、五九ページ。
- 24) 夏目漱石、書簡、前掲書、218ページ。
- 25) 同前書、218ページ。
- 26) 加藤二郎、漱石と禅、翰林書房、1999年、149ページ。

- 27) 釋宗演, 禪の境地, 漱石全集日報第十六号, 岩波書店, 8 ページ。
- 28) 鬼村元成, キムラゲンジョウと読み, 21歳の雲水 (修業僧)。
- 29) 富沢敬道, 鬼村元成 (21歳) の先輩 (24四歳) で共に漱石を敬愛する。
- 30) 夏目鏡子 松岡讓筆録, 漱石の思ひ出, 前掲書, 150ページ。
- 31) 古川久編, 夏目漱石辞典, 東京堂出版, 昭和五七年105ページに「天に則り私を去る」と訓むとある。
- 32) 小宮豊隆, 夏目漱石, 岩波書店, 昭和二十四年, 873ページ。
- 33) 三好行雄, 対談漱石の帰結, 國文學, 漱石「道草」から「明暗」へ, 學燈社, 昭和六十一年, 15 ページ。
- 34) 夏目鏡子 松岡讓筆録, 漱石の思ひ出後編, 前掲書, 139ページ。
- 35) 荒正人, 増補改訂漱石研究年表, 前掲書, 847ページ。
- 36) 夏目漱石, 書簡, 前掲書, 213ページ。
- 37) 同前書, 218ページ。
- 38) 同前書, 193ページ。195ページ。
- 39) 夏目鏡子 松岡讓筆録, 漱石の思ひ出後編, 前掲書, 141-146ページ。
- 40) 瀧田栲菘, 夏目先生と書畫, 文豪夏目漱石所収, 春陽堂, 大正十年, 212ページ。
- 41) 夏目漱石, 書簡, 前掲書, 229ページ。
- 42) 同前書, 231ページ。
- 43) 同前書, 233ページ。
- 44) 荒正人, 増補改訂漱石研究年表, 前掲書, 853ページ。
- 45) 夏目鏡子 松岡讓筆録, 漱石の思ひ出後編, 前掲書, 148-149ページ。
- 46) 同前書, 140ページ。
- 47) 赤木桁平, 漱石先生の追懐, 文豪夏目漱石 (前掲書) 所収, 258ページ。
- 48) 大正五年当時の精養軒は築地にあり, 後に, 現在地の上野に移る。
- 49) 夏目鏡子 松岡讓筆録, 漱石の思ひ出後編, 前掲書, 151-153ページ。
- 50) 辰野隆 (1888-1964), 辰野金吾の長男, 東大で仏文学を講じ, 小松秀雄, 渡辺一夫等は門下生。
- 51) 辰野隆, 『明暗』の漱石, 辰野隆髓想全集第一卷, 忘れぬ人々所収, 福武書店, 昭和五十八年, 89 ページ。
- 52) 『明暗』は「188」で終わり, 付言としてそれを十一月二十一日の午前中に書き終ったと記されている。『明暗』, 春秋社, 大正九年, 973ページ。
- 53) 夏目鏡子 松岡讓筆録, 漱石の思ひ出後編, 前掲書, 154ページ。
- 54) 同前書, 157ページ。
- 55) 同前書, 160ページ。
- 56) 同前書, 166ページ。
- 57) 松根東洋城, 臨終へまで, 漱石全集月報第十九号所収, 岩波書店, 昭和四年, 2 ページ。
- 58) 鈴木敏也, 漱石氏の最期, 漱石全集月報第二十号所収, 岩波書店, 昭和四年, 4 ページ。
- 59) 森田草平, 続夏目漱石, 甲鳥書林, 昭和十八年, 836ページ。
- 60) 夏目伸六, 父の法要, 新潮社, 昭和三十七年, 90-93ページ。

追記

文中の引用文に用いられた旧漢字, 旧仮名は一部を除き新漢字, 新仮名に改めたことをことわっておきたい。